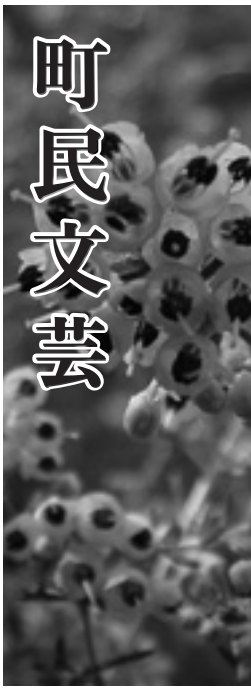

只見短歌会　十一月詠草

大塚栄一　指導

初冬の日の差す畑に残しおく余りに細き大根を抜く　斎藤ちひろ

近隣の新築成りしか凍てしるき今宵明りの点りて親し　古川　英子

修理後に僅かな段差となりし道車押す媼息を弾ます　目黒　富子

新居にて孫子と共に暮しをれど夢に出づるは里の古家ぞ　吉津　政枝

知恵遅き子らと浸りし足湯より上がれば入浴したるが如し　五十嵐夏美

白鳥の飛来は雪の早しとふ伝へぞ田の面に群の見ゆるも　渡部ゆき子

降る雨が霙に変る暮れ時を面会帰りの娘を案ず　吉津久仁子

枕辺に身内ら集め三度もの手術に耐へ来し友は逝きたり　皆川　恒子

人ならば百歳越ゆる家の猫決まりし所に排便すます　渡部ヨリ子

懇ろな看護支援の説明に独り居の姉は入所決意す　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十二月例会

目黒十一　指導

只見川渡るカモシカ紅葉照る　邦男

西へ逝く友送らねば霜の花　恒夫

冬菊のひかりや軒に括られて　一穂

麟閣の一服香る冬の蜂　吉児

冬草を啄ばむ朱鷺の歩のゆるし　洋子

星月夜見上げて佐渡の波静か　隆堂

山里の九時は深夜に冬銀河　敦子

秋刀魚売る声生き生きと港町　邦夫

無住家の松の根方の薮柑子　郁子

ゲートボール始まるまでの焚火の輪　康女

銀杏の葉落ちたる後のなお大き　礼

残菊のたばねられたるまま匂ふ　笑羊

一茶忌や金子兜太の言う溲瓶　一灯

一茶好きの人の集いし冬紅葉　リウコ

初雪の近きを知らす温き風　都

小春日や演壇に説く身障者　雲仰ぎ両足踏んで大根引く

湖に浮かぶ白鳥の群おだやかに

みかん箱りんご箱積み冬に入る

農の手の日に日に優し牡丹鍋

大根を引き抜いてみて知る重さ

火祭の夜ややんわりと初の雪

柿吊し終えたる夜やテレスケホー

初雪や取り残したる葱の青

暁の空極上に冬星座

白菜の大き過ぎたる重さかな

初雪や学生寮の夕明り

居間の窓残し終えたる冬囲

大根の隆々にとして曲がりいる

山の影来ぬうち退院冬菜畑